

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、①②③は段落の番号です。

① よく知られているように、タンポポには外国からやってきた外来の西洋タンポポと、昔から日本にある在来の日本タンポポに大別される。実際には、西洋タンポポと呼ばれる中に、セイヨウタンポポやアカミタンポポなどいくつかの種類があり、日本タンポポの中にもカントウタンポポやカンサイタンポポなどいくつか種類があるが、ここではタンジュンに「西洋タンポポ」「日本タンポポ」と表現することにしよう。

② 外来の西洋タンポポは、勢力を拡大している。これに対して、在来の日本タンポポはだんだんと数を減らしている。そのため、西洋タンポポが日本タンポポを圧倒して追いやられていくように見られることもある。

③ しかし、^①実際は少し違う。西洋タンポポと日本タンポポとは棲む^すニッチが異なるのである。

④ 西洋タンポポと日本タンポポの特徴を比較してみるとにしよう。

⑤ まず、種子のサイズは西洋タンポポの方が小さく軽い。タンポポは風で種子を飛ばすから、種子が小さい西洋タンポポの方が、より遠くまで種子を飛ばすことができる。種子が小さいので、その分、種子の数を多くすることができる。そのため、西洋タンポポの方が、日本タンポポよりも種子数が多いのである。

⑥ また、日本タンポポは、ハチやアブなどが花粉を運んでこない^②と種子ができない他殖性であるのに対して、西洋タンポポは自分だけで種子を作ることのできる自殖性である。そのため、仲間がいなくても、ハチやアブなどの昆虫がいなくても、一株だけあれば種子を作ることができるのだ。

⑦ それだけではない。日本タンポポは春にしか咲かないのに対して、西洋タンポポは一年中、花を咲かせることができる。

⑧ そのため、西洋タンポポは次から次へと花を咲かせ、次から次へと種子を作って、バラまくことができるのである。

⑨ こうして見ると、^②どうも西洋タンポポの方が、日本タンポポよりも繁殖力が旺盛で、強い感じがする。西洋タンポポが大繁殖して、繁殖力の弱い日本タンポポを追いやっていくイメージも納得できる。

⑩ しかし、実際には違う。日本タンポポには日本タンポポの戦略があるのである。

⑪ タンポポを指標とした「タンポポ調査」と呼ばれるものが、よく行われている。西洋タンポポは都市化したところにも多く分布する。これに対して、日本タンポポは、自然の残った田園地帯や郊外によく見られる。そのため、西洋タンポポと日本タンポポの分布を見ると、環境が都市化しているかどうかがわかるのである。

⑫ じつは、日本タンポポは自然が豊かで、他の植物が生えているところでは有利さを発揮する。たとえば、日本タンポポは西洋タンポポよりも種子が大きい。確かに遠くまで飛ばすという点では大きくて重い種子は不利である。

⑬ ①、大きくて重い種子からは、大きな芽を出すことができる。これは他の植物の芽生えと競って伸びるためには、必要なことだ。さらに、他の花の花粉と交配することで、バラエティに富んださまざまな子孫を残すことができる。多様な子孫を残すということも、多様な環境があり、さまざまな病害虫に対処しなければならぬ自然の中で生き残るには大切なことである。

⑭ そして、重要な戦略は「春にしか咲かない」ということである。日本タンポポは春に咲いて、さつさと種子を飛ばすと、根だけ残して地面から上は自ら枯れてしまう。これは、冬眠の逆で夏に地面の下で眠っているの、「夏眠」と呼ばれている。

⑮ 夏が近づくと、他の植物が枝葉を伸ばし、生い茂る。そんなところで、小さなタンポポが頑張っても、光は当たらず生きていくことができない。そこで、強い植物との無駄な争いを避けて、地面の下でやり過ごすのである。

⑯ ライバルが多い夏にナンバー1になることは難しいから、ライバルたちが芽を出す前に、花を咲かせて種を残すという戦略なのである。

⑰ 一方、西洋タンポポは日本の四季を知らないから、他の植物が生い茂る夏の間も、葉を広げ花を咲かせようとする。そのため、西洋タンポポは枯れてしまい、生きていくことができないのだ。同じように枯れているように見えても、自ら葉を枯らして眠っている日本タンポポはまったくダメージがない。一年中咲いている西洋タンポポに比べて、春しか咲かない日本タンポポは劣っているようにも思えるが、じつは戦略的だったのだ。

17 このように、西洋タンポポは他の植物が生えるような場所には生えることができない。だから、その代わりに他の植物が生えないような都会の道ばたで花を咲かせて、分布を広げているのである。西洋タンポポが広がり、日本タンポポが少なくなっているという現象は、単に他の植物が生えるような元々の日本の自然が減っているからだったのである。

18 どんな生き物もナンバー1になれるニッチがなければ生きていくことができない。

19 しかし、すべての生き物にとつて、ニッチは約束された安住の地ではない。実際には、さまざまな生き物がニッチを奪い合って競い合う。ニッチを守るためには、常にナンバー1でありつづけなければならないのだ。

20 2、高校野球で日本一の栄冠に輝くのは大変である。都道府県で優勝することは全国優勝に比べればやさしいが、それでも大変なことだ。市町村で優勝と言え、もう少しやさしくなる。さらに町内で優勝するとすれば、ライバルはかなり少なくなるだろう。このように範囲を狭めていけば、ナンバー1になりやすくなる。

21 さらに野球でまともに勝負するのではなく、打率やベースランニングの速さで競ったり、キャッチボールの正確さを誇ったり、少し勝負の内容をずらせば、ナンバー1になりやすい。スポーツはできなくても、プロ野球の選手の名前を誰よりも言えるというナンバー1もいるかも知れない。このように、条件を小さく細かく絞り込んでいけば、ナンバー1になれるチャンスが生まれてくるのである。そして、まともに競い合うことを考えるよりも、条件をずらしながら、ナンバー1になれる場所を探した方がよい。

22 そのため、多くの生物は小さなニッチを確保して、それを守っている。ニッチが小さいということは、たくさんの生物がニッチを分け合うことができる。

23 だからこそ、これだけ多くの生物が自然界に共存しているのである。

(稲垣栄洋「植物はなぜ動かないのか」による)

注 ニッチ：ある生物種が生息している特別な環境。生息圏のこと。

問一 線部①・③のカタカナを漢字に直し、②の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 本文中の 1・2 に入れるのに適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ たとえば ウ だから エ しかし

問三 線部(1)とありますが、筆者はどのような見方を否定しているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア タンポポには様々な種類があるが、大きくは「西洋タンポポ」と「日本タンポポ」の二つに分類してもかまわないという見方。

イ 在来^①の日本タンポポの数が次第に減ってきているため、外来の西洋タンポポの方が日本国内で数を増やしやすいという見方。

ウ 外来の西洋タンポポが日本国内で大繁殖したせいで、在来^②の日本タンポポが圧倒され追いやられているという見方。

エ 西洋タンポポと日本タンポポは元々花を咲かせる場所が異なるので、どちらがより強い植物であるかは判断できないという見方。

問四 線部(2)とありますが、それは西洋タンポポにどのような特徴があるからですか。その特徴をまとめた次の文の 1・3 に入れるのに適当な表現を、本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

まず、西洋タンポポは種子が 1。そのため、たくさん^①の種子を作って遠くまで飛ばすことができる。また、他の昆虫に頼らなくても種子ができる 2 であるうえに、 3 ため、次から次へと種子を作ってバラまくことができる。

問五 — 線部(3)とありますが、日本タンポポのどのような点が「戦略的」であるのですか。七十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六 — 線部(4)とありますが、実際に西洋タンポポはどのようにしていますか。本文中から三十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア タンポポの分布状況を調べる「タンポポ調査」により、日本タンポポを保護するためにどのような環境を守るべきかが見えてくる。

イ 植物が生い茂る豊かな自然が失われたことで、日本タンポポの数が減っている。

ウ 自然界における植物と同じように、人間も自分の得意な分野に絞って勝負することで、生きる道を確保していくことが重要である。

エ あらゆる生物は自然界で共存することを目指して、競い合わないで済むように自分だけの小さなニッチを守りながら生きている。

問八 この文章を四つに分けたとき、結論にあたる四つめのまとまりはどこから始まりますか。その段落番号を数字で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

北海道の農業高校に通うエイジは、学校で羊の出産に立ち会ったことをきっかけに、未熟児で生まれた子羊の世話を担当するようになる。しかしその子羊は、食用として出荷されることになっていた。

玄関で靴をはきかえ、外に出る。

いつもは実習準備室で作業服に着がえ、長靴をはいて羊舎のすぐ近くの出口から外へ出る。しかし今は、制服のまま、生徒玄関からそのまま外へ出た。

目の前に、青々とした芝生が広がっている。学校が自慢にしている前庭だ。

陸上部が投てきの練習をしたり、生徒たちが休み時間にボール遊びをしたりするためか、ところどころ土がうっすらと露出している。その先にはパドックがあり、柵で仕切られた隣にはグラウンドが続く。

(1) 濃い緑がまぶしくて、見上げた空は雲ひとつない快晴だった。

あまりに強烈な色のコントラストと、清澄な空気のすがすがしさに、ふと国語で習ったばかりの、石川啄木の句を思いだす。

— なんだっけな……啄木が学校をさぼって草の上に寝転んで……〈空に吸はれし十五の心〉、だったな、たしか。思春期の鬱々とした心を吸いこむような青い澄んだ空。エイジは、その短歌のイメージを、たった今、理解した気がした。

北国を駆け足で過ぎていく短い夏は、濃く美しい自然の色とは 1、はかなく淡い香りしか残さない。

かすかに芳ばしく香る豊かな芝生の上で、エイジはゆったりと踏みしめながら進んだ。

数十メートル先の羊舎の臭いが、だんだん近づいてくる。

羊たちの鳴き声は、玄関を出たときから耳に入っていた。

ひとときわ高い、子羊の鳴き声が聞こえたとき、エイジはたまらずに駆けだした。

羊舎へ駆けこみ、柵にしがみつくと、何事か、と羊たちがいつせいにエイジを見る。その中に、あの顔があった。狂おしいほどの愛しさと、切なさ、堰を切ったようにあふれ出してくる。

エイジは大声で、No.8を呼んだ。

8番、ではなく、2 エイジが名づけていた、その名で。

「フブキ！」

猛吹雪の朝、生まれおちる瞬間から、大切に、大切に育ててきたフブキ。

ほかの子羊とは、声も、顔も、何もかもがちがう。

エイジにとって、特別な、たった一頭だけの、子羊。

フブキは、いつものようにエイジに駆けよってくる。ほかの羊たちが、そそくさと道をあける。

エイジは、思いきり手を伸ばして、フブキの名を呼びつづけ、3 頭をなで回した。

フブキの顔がばやけ、自分の目に涙が浮かんでいることに気づいたとき、うしろで突然、声がした。

「エイジ」

エイジは固まった。

「エイジ……」

キシダ先生が、見たことのない表情で立っていた。

家畜はベツトじゃない。

いつかのようにエイジの頭にキシダ先生の声がこだまする。

しかし、キシダ先生は何も言わず、静かにエイジから目を外し、フブキを見た。

「……名前を、つけてしまったのか……」

つらそうな声だった。怒鳴られることを覚悟していたエイジは、そんなキシダ先生のように、こらえていた感情が涙とともにあふれてくるのを止められなかった。

「わかってます！ 家畜は、……家畜はベツトじゃないっていうんでしょう！？ それはわかってます！ わかってるけど、わかっているけど……でも、こいつは……俺にとつて、こいつは……」

エイジは、ふり向き、フブキを見た。そして、思いきつて言った。

「俺にとつてこいつは、家畜じゃないんです！」

「……そうだな」

しばしの沈黙のあと、キシダ先生はゆっくりと語りだした。

「お前が、人一倍畜産実習に熱心で、人一倍家畜に愛着を持っていることは、サトウ先生から聞いていた。……No. 8に思い入れがありすぎて、心配だ、とも聞いていたよ」

エイジは、黙ってキシダ先生の言葉に耳を傾けていた。

「人間が家畜を飼うことの意味。人間が生きていくために必要な家畜の意義……。どんなに頭でわかっていても、ひとたび家畜にそれ以上の思いを持ってしまえば、それは残酷な動物殺しではない。人間も動物も、同じ生き物なんだからな。だから、世界中にはたくさんの方食主義の人たちもいるな……。じゃあ、エイジ、お前はこれからどうする？」

「……」

うつむいてしまったエイジに、キシダ先生はやさしく言った。

「話をすり替えている、と思うかもな。だけどな、先生はこう思うんだ。人間の社会から、家畜を、食肉を、排除することは不可能だ。……だから、せめて、人間は知らなくちゃいけない。自分たちが食べている肉が、どうやってできているのかを。そして、感謝して、家畜に敬意を払って食べなくちゃならないんだ。そのためにも決して変な同情や、愛玩動物に対するような気持ちを抱くべきではない。……愛玩動物って意味、わかるか？」

エイジは、小さくうなずき、そつと涙をぬぐった。

「……ベツト、っていうことですよ」

「……そうだ。……もう一度言う。家畜はベツトじゃない。……しかし、名前をつけてしまったら、それはもう、家畜じゃない。ベツトだ。……No. 8は、お前にとつてベツトになってしまったんだ」

エイジは、はつとして顔を上げた。

「だからな、エイジ。お前は、もうここへ来るべきじゃない」

エイジは、頭を殴られたような衝撃を受けた。

「……少なくとも、出荷するまで、羊舎へ来るべきじゃない。ここは、ペットを飼うところじゃないんだ。家畜を飼育し、学ぶところなんだ」

そう話を結んだキシダ先生は、最後にこうつけ足した。

〔No.8を含め、子羊十頭を出荷するのは、七月二十五日水曜日。午前八時だ。ちょうど夏休みに入る日だ〕
〔6〕キシダ先生の言葉は、死刑執行日^{しけいしつぎふ}を告げられたかのごとく、重く、冷たくエイジに響いた。

(樋口かおり「羊に名前をつけてしまった少年」による)

注(1) 羊舎：羊小屋。

(2) 投てき：砲丸^{ひょうがん}などを投げる陸上競技。

(3) パドック：牛が運動する場所。

(4) コントラスト：色の対比。

問一 線部とありますが、「短歌」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 五・七・五・七・七の三十一音からなる詩歌。

イ 五・七・五の十七音で季語を入れて詠む詩歌。

ウ 昔から言い習わされてきた教訓などを含む語句。

エ 意見や目標をわかりやすく言い表した短い文句。

問二 本文中の 1 3 に入れるのに適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ひそかに イ いいかげんに ウ うらはらに エ がむしやらに オ よけいに

問三 線部(1)とありますが、エイジはここで何を見ているのですか。本文中から二つ抜き出して答えなさい。

問四 線部(2)、(3)とありますが、「ゆつたりと踏みしめながら進ん」でいたエイジが「駆けだした」のはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分呼んでいるような羊たちの声に気づき、気ままな散歩を中断してでも大好きな家畜たちに会いたくして仕方なくなつたから。

イ 子羊の高い鳴き声が聞こえてきたので、自分が飼育している大事な子羊が危険にさらされているのではないかと不安になつたから。

ウ 自分が特別かわいがっている子羊の鳴き声を聞いた途端^{とたん}に、もうすぐ別れねばならない子羊への思いを抑えきれなくなつたから。

エ 子羊の特徴的な鳴き声を耳にしたと同時に、自分になつてくれている子羊を最後まで大切に世話しようと決意が固まつたから。

問五 線部(4)とありますが、ここからうかがえるキシダ先生的心情を説明した次の文の 1 3 に入れるのに適当な表現を、本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。ただし 3 は七字で抜き出すこと。

「8番」とは別に「1」という名前をつけてしまったことで、エイジにとってその子羊は 2 ではなく愛玩動物となつてしまった。そうなればその子羊を食用にすることは 3 を意味してエイジを苦しめることになるだろうと思い、心を痛めている。

問六 線部(5)とありますが、このように言うキシダ先生の考えを説明した次の文の□に入れるのに適当な表現を、五十五字以内で答えなさい。

人間は家畜を飼ひ、その肉を食べて生きていくしかないのだから、□という考え。

問七 線部(6)とありますが、この時のエイジの心情をわかりやすく説明しなさい。

問八 本文についての説明として、あてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 色彩や香りについての描写をすることで、読者の視覚や嗅覚といった五感に訴えかけて物語の舞台を鮮やかに想像させ印象づけようとしている。

イ 石川啄木の短歌を引用することで、すがすがしい空気を吸いながら学校を抜け出した解放感にひたっているエイジの心を浮き彫りにしている。

ウ 「北国を駆け足で過ぎていく短い夏」や「堰を切ったように」、「頭を殴られたような」といった比喩表現を用いることで、言葉に実感を込めている。

エ 会話の中に「……」を多く用いることで、エイジの思い悩む気持ちやキシダ先生が慎重に言葉を選んで語りかけている様子などを表している。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上本文に一部改変した箇所があります。

中学生になると、なぜ自分は気が付くと、いつも友だちからはなれてひとりになっているんだろうとよく思いました。一方では、社会には、どうしてこれほどに貧富の差があるのか。両親も兄や姉もこんなに働くのに、なぜお盆とお正月の年二回しか白いご飯が食べられないのか。そんなこともよく考えていました。

ただ、私はそんなふうにはわかないことを抱えながら、他人に、つまりは先生にも、周りの大人たちにも、その答えを尋ねてみることはしませんでした。すぐに本で調べてみることもしませんでした。問いのまま、あめ玉のように口の中をころがしていた、という言い方が当たっているように思います。いくつものあめ玉が出たり、引つ込んだり。でも、ゆつくりなめながら考えるのは楽しいことでした。今も、そんな人は小学校に限らず、中学校にも、高校にも、大学にもおおぜいいるんだろうな、と思います。問いのまま、他人に質問もせず、他の手段で急ぎ答えを求めることもなく、言ってみれば問いそのものとゆつくり、ひっそりとたわむれている人たちが。そして、一〇年、二〇年、ときには三〇年もたつて、思いがけないとき、思いがけないところで、答えに出会う楽しさ、嬉しさといったら。でも同時に、人が人と縁あつて出会つたら、黙つていないで質問すること。それがどんなに互いを近付け結びつけて、新しい世界への扉を開けてくれるかも、私はこれまでの人生で学んできました。

私たちの暮らすこの日本の社会では、どうしてか質問を遠慮する空気が強いようで、私はそれをいつも残念なことだと思ってきました。そんなふうでしたから、勤務先の短大の授業でも、話の途中でも質問してほしいと学生たちに頼んできました。でも、そうしてくれる学生はなかなか出てきませんでした。終わってから、個人的に質問してくるのです。これはずるい、と私はいつも思つて、注意もしました。だってそれって答えを一人占めしようということでしょう？ 質問するのは、確かにエネルギーのいることだけれど、でも、質問するという労をとつて、その収穫を居合わせた人々と分かち合う。それぐらい、お互いしたっていいじゃないか。そう思つてきたのです。学生たちに対する私の要求はきつすぎますか。でも私は、これはクラスへの貢献の一つでもあると思うのです。

(清水真砂子「大人になるっておもしろい？」による)

問一 線部とありますが、「労をとる」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア むだを省く イ 嫌なことを我慢する ウ 気合いを入れる エ 手間をかける

国語問題

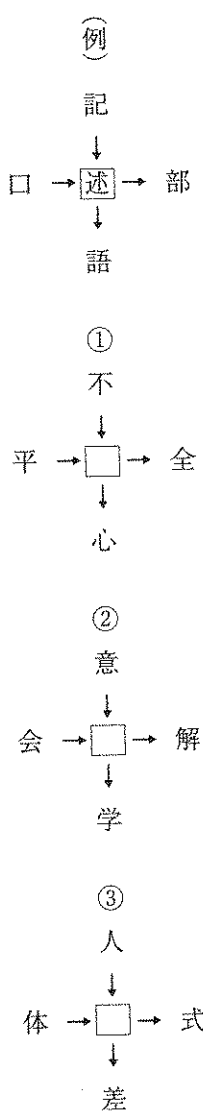
(八枚のうちの七枚め)

問二——線部とありますが、どうすることを指していますか。本文中から六十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問三 筆者は「質問すること」がなぜ大切だと述べているのですか。理由を二点指摘しなさい。

(Ⅱ) 次の小問に答えなさい。

問一 次の①③の□にそれぞれ適当な漢字一字を入れて、タテヨコの熟語を完成させなさい。



問二 次の各文の□に入れるのに最も適当な言葉を選び、記号で答えなさい。

① 練習の厳しさに三日で□、習い事をやめてしまった。

ア 腰を上げて イ 息を上げて ウ 音を上げて エ 顔を上げて

② 彼は愛想はないが、□職人だ。

ア 腹が立つ イ 腕が立つ ウ 口が立つ エ 角が立つ

